

# 成巫儀礼と神口・神語り

—宮古カンカカリヤーをめぐつて—

福田 晃

はじめに

## —安世知トルエさんの成巫過程—

奄美のユタの成巫儀礼およびそれとともにうなう呪詞については、山

下欣一氏の『奄美のシャーマニズム』『奄美説話の研究』に詳しく、

それによるものであるが、またわたくしは山下欣一氏に導かれて、直接、名瀬市のユタに面談して、親しくその成巫の過程をうかがう機会を幾度か得ることができた。奄美では著名な親ユタ・安世知照信さんの奥さんである安世知トルエさん訪問もその一つであった。昭和五十六年の十一月二十四日のこと<sup>(1)</sup>、たまたまご主人が留守であつたればこそ、トルエさんからその成巫の体験をうかがうことができた。それはおよそ次のようなものであった。

〔罹病〕

九年前（昭和四十六年、三十六歳）に新築をした。たまたまお産をしたが、産後、具合が悪くて産婦人科の先生やあっちこっちの医

者にかかったが、一向によくならない。そのうちに時折あくびが出ようになつた。ユタの方に見てもらうと、それは神拝みをやらないと駄目だと言われる。水の神（水棚）を拝んだりして、寝たり起きたりして一年が過ぎ、ユタの主人・照信さんが拝んでくれたりして、大分、体もよくなってきた。

〔ボンダデ〕

そこで主人が神を拝めと言つてくれたが、その気にはなれない。心の問題と思い創価学会に入信してみた。ところが、すでに十三年前に巫病を克服して神拝みのユタをしている主人が巫病をぶり返して体の具合が悪くなってきた。ユタの方に見てもらうと、主人に代つても神拝みをしないと、主人も駄目になると言われる。なんとか主人を仕事の漁に外へ出ますが、主人は具合が悪いと言つてすぐに戻つてしまつ。主人の具合の悪いときは、自分の体はよくなる。主人の親ユタになる田畠マツガネさんなど、あっちこっちのユタに見てもうると、それはタカポンを立てて神拝みをするしかないと言われ、二人で人助けの神拝みをしないと家は駄目になると言わ

れる。それで、主人の照信さんを親ユタとして自分の実家でボンダ  
テ（成巫式）をやった。三十七歳の年である。

### 〔神口〕

それでも自分としては納得がゆかない。子どもたちも、自分が白い着物を着て神拝みをすることを恥しくて嫌だという。なんとかしなくちゃならないと思い、ひそかにキリスト教にも入信した。天理教にも通った。しかし体はどんどん痩せてゆく。そのうちに、大阪にいる子どもも、自分と同じようにならぬがままだった。こうなると、自分の神拝みを嫌がっていた子どもたちが、「母ちゃん、神拝みをやって」と言うようになった。「そうかあ」と言って、神棚の前で線香を立てる、ものすごい煙が出た。神拝みをやらないと、こんなことになると、主人も言う。それでも神座に坐るのは嫌だと思っていたが、たまたま夜中に体が動かなくなつたかと思うと、

フクヨーカナチ ハルヨーウイチ

という、全く意味の分らない言葉が自分の口から飛び出した。そして太鼓の音がドンドンと響き、馬の蹄の音がパッカパッカと聞こえてくる。それはある海岸の状景であった。また夜の二時、三時に同じような状態がおこり、見たこともない神さまの顔がぐうっと見えてくる。これは不思議だなあと思って坐る。神座に坐ろうと思うが、主人が易をやっているので、それができない。そうして一月、二月、拝まずにいると今度は、

アオナービル ミチヨナービル

という聞いたこともない言葉が飛び出してきた。「わたくしの神か、

迷いの神か、まことの神なら朝な夕な拝みます」と言うと、

ヨーカミノカーミスズナンドカミナルタル オーカンガナシ

と言つて神が乗り込んでこられる。次々と普段の折には出ない不思議な言葉が出てくる。これで心が決まった。母が亡くなつたのもそのせいだ。一生、神拝みをしてゆこうと決心した。すると、それからは「がベラベラと出るようになった。

### 〔七さく廻り〕

「がベラベラと出で、神が乗り込んでこられて、いろいろと神拝みの指示をされた。「アガレの島の用の御崎を拝め」と言われて、体はふわふわして、神に連れられ、七つの山を越えて用の御崎へ行くと、その夢で神が見せられたと全く同じ状景がそこにあった。用の御崎に立つて、ネリヤの神を拝むと、大きな赤い魚が足元に来て、これをつかまえようと渦巻く海へ飛び込んで泳いだ。この後はしばらく体はすっきりする。次々と神の指示が出てくる。またふらふらと歩きたくなる。台所に立つと歌声が聞えてくる。アヤマル御崎に行つて拝む。また湯湾岳に登つても拝むということもあつた。こうして、少しずつ体の回復を感じられてくる。

### 〔憑依の神語り〕

三ヶ月ごと、ミズノト・トリの日、生れ島のショージゴに拝みに行くが、三年目の折、昼の十一時ごろ、鏡を手にして行くと、それにはパアーッと月が落ちる。「ああゝ、月」と言うと、親ユタの主人にはそれは見えない。それからどうなつたか、自分は素裸かになつ

て川に飛び込んで、

オモイマツガネヨ、アガル日ノハルカナル、オモイマツガネハ  
ヨノハジマリ、シモノクカミノクアゲロ……

と口が飛び出し、「思い松金」のナガレがベラベラと出てきた。それで自分の神はホゾンガナシだということはっきり分り、何かつきものがおりたように、体の具合がほぼ完治の状態となつた。

#### 〔七年祝〕

その後も、毎朝の祭、月ごとの祭（月の十六日）、三月ごとのショウジゴ祭をおこない、やがて七年目に、実家において親ユタの導きのもと、兄弟のユタや親族が集つて、打ちあげの祭をおこなつた。これで巫病は全く完治して親ユタから自立することとなつた。

#### 〔巫業の開始〕

七年の祝いまでは、親ユタを立てるべきもので、他人をみるとはなかつたが、七年祝がすむと、自らの祭をおこないながら、人助けとしてつい（易）もやり、子ユタの面倒をみるとはなつた。その折の願いの呪詞は、親ユタから直接教えられたものではなく、七年の間、拝み神との対応のなかで、自然と口に現れて自ずから体得したものである。「思い松金」は、自らの月ごとの祭、三月ごとのミズノト・トリのショウジゴ祭に唱えるとともに、神おろしをするト占の折、あるいは成巫儀礼のなかであげることとなつた。ただし、夫は自分が自立して巫業をおこなうことを嫌うので、もっぱら夫の巫業を助けることとしている。夫の拝む神と自分のそれとは異なるからである。

右の安世知ハルエさんの成巫体験で注目されるのは、幻覚・幻聴とも推される神ダーリィが神口をともなうことである。そして神に唱える呪詞も、拝み神との交流のなかで、自ずから口に現れてきたとするのも、不思議と言わねばならぬ。勿論、それは親ユタの導きに従つて成巫を果すのであるから、その影響下に生じたものにちがいないが、安世知さん自身も周りの人々も、それは彼女自らが神との交換のなかで体得したと判じている。さらに注目すべきは、その成巫過程のショウジゴ祭のなかで、神口として「思い松金」が自ずから彼女の体からふきあげ、そのことによつて彼女の巫病が七年を待たずにはぼ完治したということである。すでにあげたごとく、この「思い松金」は日光感精神話にしたがう巫祖神話であり、巫祖のテダガナシの子なる成巫の達成を叙した物語で、それゆえに神懸りの呪詞として巫業のなかで用いられるものであつた。<sup>(2)</sup>したがつて、それが自ずから彼女の体からふきあげたというのは、彼女が巫祖神そのものと化したことであり、それゆえに巫病は回復するという結果となつなどいうべきものである。しかも、それが、彼女の巫業のなかで、もっとも重要な呪詞として機能していることも注目されよう。

## 一、根間ツル子さんの成巫過程

宮古島の平良市で開催された。その催しの一環として、第三日目には、当地のカンカカリヤーをお訪ねして、成巫の体験などをうかがうことなどが試みられた。八月八日、十余名で、東仲のカンカカリヤー・根間忠彦氏<sup>(3)</sup>宅を訪ねると、同氏のほかに、同じく当地のカンカカリヤーの根間ツル子さんおよび下地ハルさんがおいでくださっていた。ちなみに、その根間ツル子さんは忠彦氏の実姉で、その親ユタ・親カンカカリヤーの立場にある方で、お若いながら、当地方のマサイカンカカリヤーのお一人で、わたくしどもの聞き取りも、主に彼女を中心におこなわれた。

根間ツル子さんは、昭和二十二年四月二十一日生まれ、祖父が当地方きってのカンカカリヤーで、セジ高い家筋の出自。それゆえに、彼女は家族や周囲の人から、神の道に入るべき人として早くから期待されていたようである。以下彼女から聞き取った成巫過程を紹介するが、それは、右の平成元年八月八日のそれと、翌九日に岩瀬博氏・松浪久子氏らの補足の聞き取りを加えたものであり、さらに平成二年八月十四日、ツル子さん宅でおこなわれたユーダミに參座させていただいた折の聞き取りによるものである。

### 〔巫病のきざし〕

十歳の頃からいろいろ不思議な夢や幻覚におそわれた。また体に毒がまわったような神ざわりがしばしばあった。

### 〔罹病〕

二十三歳の折、突然神さまが枕元に立って、「お前はわたくしの言ふことをきかぬと、命をとるか、気狂いにするか、いずれかだ」

と言われた。ちょっと気になり、お婆（カンカカリヤー）たちのところへ行かなくちゃなんとは思つたが、そのままにしていたら、翌日から激しい神ダーリイが始まった。無意識のうちに線香を火の神に立てるが、体はガタガタ震え、火をつけることができず、母親を呼んでつけてもらう。しかし、震えは止まらず全く眠れない。飲まず食わずの状態となつた。それが三ヶ月間に及んだ。それは、自分の母親の命を取りに来た悪霊との戦いで、母親を守るため、不眠不休で戦いその戦いを通して、神さまから靈界とはどういうものかを教えられた。この期間に神さまは、自分の脳・背骨・肋骨などを入れ替え、神の乗り降りできる神人として体质改善をなさつたらしい。

### 〔憑依遍歴〕

最初の三ヶ月が過ぎたある日、ふっと目覚めるような、今まで自分は何をやっていたのか、どっかの世界から現世に戻されるような不思議な感じがした。太陽の光がこの世のものであり、自分はこの世にいるという自覚がおこつた。記憶喪失から記憶が戻つたという状態。それから三日間、眠ることを許された。その後の三ヶ月は、少しづつ神さまに許されてゆくように、少しづつ落ち着いてゆく。その三ヶ月の間は、神々に導かれて、地下のグソー・龍宮をめぐり、唐の国に漂泊・遍歴し、あるいは天王界を訪れたといふ。（それにについては、松浪久子氏が詳しく紹介しており、今はその要約のみをあげる。）

I、まず最初はグソーを訪れた。地面が割れて階段を降りると、死者が飲んで現世を忘れる水の洞<sup>(6)</sup>に出る。そこから千鶴の龍宮

の底を通って行くと、死靈を慰める役をつとめるカンカカリヤーの受付の白砂に出る。そこで五人の女神に迎えられ、さらに進むと、小さな岩穴があり、そこを抜けて薄原を行き、再び岩穴を出ると、鏡のような水が広がる。それは宮古の南の果ての浜で、その太陽はさおざおと身が清まるような色で、この世の光とは違っていた。

〈冥界遍歴〉

II、次には唐の国を訪れた。久松から舟が漂流、緑色の龍に乗せてもらつて唐に着く。唐の国では、自分を打ち殺そうとする男に襲われるが、うまく逃れる。また池間島に似た島で稻穂をもらう。帰る道を捜して行くと、洪水がおり、たまたま男女二児の命を助ける。海岸で難波船を弔い、宮古に向つて舟出するが、舟は八重山に着く。ここでもある男に襲われるが、無事に八重山を出航、舟の中で二つの遺骨を弔う。舟は嵐に遭い、沖縄本島東の浜比嘉に着く。その間にさまでまな受難や不思議に遭遇した。

〈異境遍歴〉

III、また空の上にも昇つた。下を見ると、宮古島がマッチ箱のようになつた。しかし神さまは、マッチ箱のように小さな島だが馬鹿にしてはいけない、この島には本当の神がいらっしゃる、神の中心は宮古だ、と教えられた。

（なお根間ツル子さんは、この異界遍歴譚はわたくしの過去であると同時に、わたくしの未来でもあると説明されている。）

〔神の口あけ〕

二十五歳の折に大きな神ダーリイがあつた。洗濯をしている途中

に、「すぐにマウ神を拝め」と命じられた。また四、五枚残つたので知らぬふりをして洗濯を終え、洗濯物を干していると、突然に干し網が切れて、体に震えがやつてきた。急いで神座に坐り線香を立てて拝むと、「暦を出せ」と言われる。それを出すと「今日の日を見ろ」と言われる。見ると、その日は、自分の生れ日であった。そこで、

ズータンディ ズーヤグミイ

と言えと言われるので、その通りに復唱して言うと、

キーノカビイヅカス ヒソービビズ

と言えと言われるので、その通りに言った。こうして次々と口移しに神口を教えて、今度は、「いままでの口を続けて言え」と言われる。「それはできません」と言うと、「ともかく言ってみる」と言わるので、思い切つて

ズータンディ ズーヤグミイ……

と言い出すと、舌がべらべらと滑つて続けて出てくる。自分にも不思議だなと思われた。

これが始まりで、自分から次々と口が出てくるようになった。それはテープが回つて、次々と出てくるような感じであった。聞いたこともない言葉が出てくる、シマの古い方言も出てくる。自分では分らないので、後に母親に聞いて理解もした。知らない御嶽の神の名が出てくるので、それは上の婆に聞いて、その御嶽を拝みに行つたりもした。新しい言葉で、次々と神を見つけた。そしてその神口を唱えて拝むと、神さまは次々と自分はこういう神だと、その役割

を教えてくださる。したがって、ベラベラと出でてくる神口は、その神を後に拝むときに使うべきものであった。

この口あけの主は、アカザトウツキとおっしゃる神さまで、人の

拝みはこの神が憑りつかないとやってもできないものであった。

### 〔神の道あけ〕（マンサン）

二十七歳の折の二月、やはり激しい神ダーリイがあった。女の神が「お膳を持って来い」と言われる。マウ神の前にお膳を置くと、半紙を七枚持つて来て敷け」と言われ、洗い米・洗わぬ米を始め、次々と供物の準備をさせられる。その材料は、不思議に市場ですでに買われていた。自分はまるで操り人形のようにやらされる。「線香を二十束縛れ」と言われ、それをやつたまでは覚えているが、それからガタガタと震えが来て、その後のことは覚えていない。やがて意識が回復、神の憑依は終わる。このとき道を開いてくれる親のカンカカリヤーは自分にはいなかった。

### 〔成巫の確認〕

「お前は道が開いたから、翌日、人がいらっしゃるから、拝んでやりなさい」と神さまに言われる。驚いてこわごわ翌日を迎えると、案の定、「この辺に若い神さまが生まれたと聞いた」と人が訪ねて来た。「人違いだ」と断ると、その後、四十度の高熱が出て倒れてしまった。神さまが罰を加えられたので、それは左の親指から毒が入り、体中がひどく痛む。うなされていると、小さい三歳ぐらいの女の子が自分を先祖の墓の方へ追い立て、墓の入口まで来ると「なかに入れ」と言う。断わると、「なかに入つて死ね」と言う。石

を投げて逃げ帰り、漲水のツカサヤーに入つて行くと、ガジュマルの木の根が蛇となって追いかけてくる。自分の家に戻つて門に入る、そこで氣絶して倒れた。やがて熱がさがり、魂が体に戻つて生き返った。

一日目からは、人が来ても戻してはならないが、線香を立てるとは恥しい、拝んでも神が出なかつたらどうするかと思うと、人の拝みをやる気にはなれない。そこで客が来ても会わないように、家の戸を閉め、押入に隠れていた。すると、人々は執拗に訪ねて来て、家の周りをぐるぐる回つて探す。それが毎日続いた。

一週間ぐらいすると、一人のお婆さんがちよこちよこと家の中に入つて来て、「あなたの祖父さんは親しくしていた」と慣れ慣れしく振る舞い、自分を引張つて行つて神座に坐らせ、線香を立てさせる。怖くてガタガタ震えて「いやだ」と拒むと、「あなたは利口なのだから」と有無を言わせず線香をつけさせられた。すると体に大きな震えがきて、それからは自分は何を言つたか分らない。気がつくと、このお婆さんが、「宮古にはハカセが生まれた」「新しい立派な子が生まれた」「やっぱり神さまはいいものだ」と、ワアワアと泣く。「あつちこつち宮古中回つても、こんなことは聞けなかつた。あなたはこんなことを言つた」と説明してくれる。このお婆さんはこれつきりで、一度と訪ねて来ることはなかつた。

### 〔巫業の開始〕

次の日からお客様が宮古全島から押し寄せてきた。あのお婆さんのことで、神座に坐ればなんとかなると思い、怖いながら線香をつけ

ると、神が乗り込んでこられる。どんどんと客が増え、一週間もたつと、客が家に入りきれなくなり、順番の札を出して、一日に十人ぐらいに限って、神拝みをし占いをするようになった。

その後、カスヤーを歩いて神願いを学び、火の神に連れられて人の魂を招く願いをやり、神さまに教えられて屋敷拝みもできるようになつた。少しずつ自分から意識的に神口・神歌(呪詞)が唱えられるようになり、いろいろな拝みができるようになつたという。

以上のような経過のもと、ツル子さんは、現在、自らのための神拝みに従いながら、人助けの拝みに精を出されている。したがって

彼女の成巫は完全に完成したものではなく、(憑依遍歴)の説明で言われるごとく、彼女は、依然として、自らの神学体系を獲得するための修業の過程にあると自覚されている。なおツル子さんが主に祀る神々は、二十三歳の〔罹病〕の折に神降(カミノブ)された方々であるが、その中心はツヅ神とマウ神である。ツヅ神はツル子さん自身の守護霊で、十七代前の先祖の霊。最初に神降して、神の道を開いてくださった神で、他の神々やさまざまの霊の中継ぎををなさつてくださるという。マウ神は先祖(守護霊)が生前に拝んでいた神。〔罹病〕の折にツル子さんの体質改善をやり、〔憑依遍歴〕に冥界・異境・天界などを案内してくださった神で、ツル子さんの神の子としての生命を守られているという。

平成二年八月十四日の夕方、わたくしは当地の佐渡山安公氏と筑波大学太学院生の島村恭則君とともに、平良市下里の根間ツル子さんのお宅をうかがい、ツル子さん自身のためのユーダミ(世の神に

「ユードウ」をお願いする神拝み)に参座させていただいた。およそ三時間、成巫の体験を話されながら、神拝みの準備をされていたが、夜の八時過ぎ、ようやくツル子さんは神座に向い、香炉に線香を立て、その煙がようやく勢いよく登り始めると、やがて手を組んで、ブツブツと神迎えの唱え言を静かに唱え続けた。およそ一時間、束ねた線香を次々と加えてゆき、部屋中に煙が立ちこもる頃、一礼して手を合わせ、膝を叩いて拍子をとりながら、神の言葉が歌い出された。<sup>(7)</sup>

キユーユードウ

今日の日を

キユイスカミソユードウ

今日の神の夜を

カミニキユードウ

神が今日

ユルンソウイ

和らいで

マナイソウイ

穏やかに

ソウグミソウイ

潜めていて

ソウンターギー

潜んでいらっしゃつて

ハイミズヌース

井の神よ

カーヌカン

元の所に

ムトウヌイチ

上がりおり

アガリティードウ

ハイエスキムトウ

ツキユウティードウ

据えられて

ニンギンヌティイシードウ

人間の手で

ハイカカイギム

ハイ懸かる心が

カカリーウティ

懸かっていて

ウシュンツウキュタイ

苦しみに同情されていたのだと言われる。こうしてユーダミは夜明け方まで続けられたのである。

バンドウトウユ

押し込められてある  
私だったんだよ

ウワーブナーケ

おのにおのに

ハイガンバリラ

ハイ頑張れ

ウナガイイイ

それぞれに

ナミルンーツア

並める道が

ウワアピトウダスキー

あんたは人助けを

ヤイスムトウ

する生まれ

ムラダスキイ

村助け

ヤイスムーヌ

その生まれなのに

ティンヌカム

天の神

それは左右相称の対句で、最初は三人称ふうに叙されながら、次第に一人称となり、神自身が祈願者のツル子さんに歌いかけられる。およそ一時間、神の言葉が終わると、ツル子さんは一礼して一息つかれる。煙草を吸いながら、今のことばをわたくしどもに説明される。それによると、今の神の言葉はツル子さんに関することで、次々といろいろな神さまがおいでくださって、自分を叱り、あるいは慰め励しなさったという。次いで長女についての神のことばが歌われる。また次女についての神のことばでは、ツル子さんの声が涙

まじりになる。後の説明では、神が次女をみごもったときの自分の苦しみに同情されていたのだと言われる。こうしてユーダミは夜明け方まで続けられたのである。

## 一、比嘉トヨさんの成巫過程

平成二年八月十四日の午前、わたくしは根間ツル子さんのユーダミに参座するに先立って、佐渡山安公氏の案内にしたがい、平良市西里の宮国恵吉家を訪ね、当家のブンダミ（健康感謝の御願）を主導なさるカンカカリヤー・比嘉トヨさんにお会いした。比嘉トヨさんは、昭和四年八月十六日の生まれで、同じく当地きつてのマサイカンカカリヤーであられる。その成巫体験については、佐渡山氏が聞き取りをして、その報告もなされていたが、ブンダミに先立って、改めてその巫病克服の体験を詳しくうかがった。以下は当日比嘉さんからうかがつたものを主とし、先の佐渡山氏の報告をもって補つたものである。ちなみにトヨさんは、その体験を堂々とよどみなく開陳されたのである。

〔巫病のきさじ〕

七歳、小学校一年生の三学期に、祖母といっしょに台湾に渡る。その頃からちよくちよくと神さまらしいものが現れたが、その当時は、はっきりしていなかった。

〔罹病〕

十七歳のときにマラリヤに罹った。重態だったが、寒いので廊下で太陽に当っていた。そのとき庭の木の枝から、すうっとおかしな形の男の神さまが降りて来られ、救急箱を抱えた看護婦の女の神さまを連れておられた。脈をとったり触つたりして、「お前は食事をしていないな」と言われ、「お前はマラリヤで熱があるんだよ」とて、お尻に大きな注射器で三本打ってくださった。自分が目をさますと、男の神さまは、「お前は神さまと約束しようね」と言われるの、「何ですか」と聞くと、「生涯、神さまと交流する人になりなさいね」と言わされた。何のか分らなかつたが、その神さまは握手をしてくれたが、それはとても暖かい手であった。男の神さまがお帰りになると、看護婦の神さまが、注射器や救急箱を片づけて、戻る前に、「あなたは神さまに反抗すると、損をするよ。今言われたことは、神さまからのお話だから、これはしつかと心に決めてなさいね」と言われる。「あなたが反抗すると、下の弟・妹は絶対に助かりませんよ」と言われて出て行かれた。それは事実で、その一週間後に妹が亡くなつた。縄跳びで遊んでいて倒れてすぐに亡くなつた。二十日後には、その下の弟が亡くなつた。さらに三カ月後にはもう一人の弟が亡くなつた。父と母は、子どもを「くして、ものにつかれたように、神拝みに回り、自分もひそかに神さまを怖れる」ととなつた。

〔巫病苦難①〕  
それから話にならないほどの苦労をした。引き揚げて一旦宮古に

戻ってきたが、ここも何もないでの、石垣島に渡り西表島にも行った。与那国島にも移り、那覇にも渡つて転々とした。自分ひとりがたよりの両親に対する責任もあり、好きな人ができても、両親もちは結婚三ヶ月で家を出た。長男を身ごもつていた。四年後に主人は戻つて来たが、またすぐ出て行つた。それを繰り返し、男、女、次々と子どもができ、六人までできた。その間の苦労は、大きな波にさらわれたみたいなものだつた。

〔憑依遍歴〕

神拝みもちょっとは忘れていたが、いろいろ不安がやつてくるので、天理教に入った。日蓮宗もやってみた。キリスト教もやってみた。「三年ずつやってみると、それはそれなりに、あの神さまが体に来る。それは苦しい苦しいものだ。それはとも言葉には言い表わせないものだ。神さまは一週間ほど苦しめて、その後で、一言、「忘れたか」と言われる。また幻というか夢というか、神さまは現れて、「ほんとうにお前がやらないで、だれがやるのか」と責められる。山に連れて上がりられたり、海に連れて行かれたりもする。山に行けばきれいな真白い顔の山の神さまが現れる。海に行けば、きれいな女の神さまが現れる。

〔巫病苦難②〕

その苦しみは、自分の体に来るだけではなく、自分の子どもの身にも当つてくる。次男は三歳のときからおかしく五歳で亡くしてしまつた。三女もノテヅリ(?)で失つた。それでも神拝みをしなくちや

ならないということは気がつかない。天理教へ足を運ぶのが少ないと、一生懸命に通つてみる。奈良の天理教本部にも行つた。

しかしあなたに浮かぶものが邪魔して、そこでの話は身に入らない。三ヶ月の修業期間に、むしろ自分の神さまが、どんどんと乗り込んで来られて、世界中のことを教えられる。神さまのコールに返事をしないと、「聞いているのか。承知したのか」と言があるので、「ハイ、承知しました」と答えると、また次のことを教えられる。天理教に通い、これを信じようとすればするほど、こんなじやないという苦労も大きくなつた。

#### 〔憑依の神語り〕

三十三歳の時、植物園で商売を始めて三日目に、神さまが、「俺を探せ、探せばお前にすべて教えてやる。宮古島すべてを教えてやる」と言われる。不審に思つてみると、それから毎日、七時、八時という時間に、何かに引張られるような感じで、雨が降ろうが風が吹こうが、植物園まで歩かされる。これが三ヶ月続いたある日、朝早くいつものように「歩け」と言わされて出て行って植物園の天辺まで連れてゆかれた。そこで、太陽がしらじらと明るみ出したとき、「あれを見ろ」と言われる。石垣の崩れた場所を見て、小さい石を二つ三つ取つて積むと、「ここが宮古島の元だ」「宮古島に先に降りた所で、ツカサヤーの元だ」と言われる。それから神さまがどんどん乗り込んで来られ、手足は血だらけになり、神さまにもまれるだけもまれる。神さまは何時間にもわたつて、自分に宮古島のすべてを教えられた。それは主に次のとく、神自らの来歴を語る神語り

であった。(これについては佐渡山氏が詳しく紹介されているので、今はそれを要約してあげる)。

I、二八〇〇年前、神の自分は、蛇の姿で宮古島に降りた。そこは植物園のいちばん高いナビフタンミ(鍋蓋嶺)という所であつた。天の神さまが、「宮古島に根を降ろし、人間が増えるようにならせてせよ」と言つて降れされた。

#### 〔蛇神の降臨〕

II、その頃、宮古島には人間は全くいなかつた。ナビフタンミの奥にあつた竜の洞穴に隠れていたが、二十年、三十年経つと、体が大きくなつてそこが窮屈になつた。百年、二百年経つても宮古島には人が住まない。体も大きくなつて、ますます窮屈になつたので、洞穴から這い出て、嶺の高い所から島を眺めると、荷川取に人間の家が二、三軒見えた。「あそこを回つてみよう」と嶺を降りて漲水を行つた。そのツカサヤーは、その頃、裏の高山はうつそうと木々が生い茂つており、その岩穴に入つて様子をみるとこととした。

#### 〔漲水御嶺示現〕

III、そのツカサヤーの近くには、家が二、三軒あり、そのうちの立派な家には、きれいな娘がいた。宮古島を広げるためには子を生まなければと思い、羽織袴の男に化けて、娘のもとに通うと、娘は子をみごもつた。娘は、その子の相手が分らないので、隣の婆さんに相談すると、「糸をつけた針を髪に差してござらん」と言われる。娘は言われたように、髪に針を刺して、糸の跡をたどつてみると、目に針を刺されて血の涙を流した大蛇がどちらを巻いて岩の上にいた。娘は驚いて家に戻り、隣の婆さんに

聞くと、「それは神さまだから、線香を二本立て、お酒と粟を供えて拝みなさい」と教えられた。教えられたようにして、隣の婆さんといっしょに一生懸命拝んでいると、「目から針を取りなさい」と言われる。おそるおそるひょいと針を抜くと、目玉がポッと出た。隣の婆さんが拝んでくれたので、娘は無事に家に戻ってきた。

#### 〈蛇神の聟入〉

IV、旧暦の三月三日、娘はよいよお産をするときとなつた。隣のお婆さんに聞くと、「きれいな着物を着て、夜明けとともに、海の波打際を行ったり来たり歩きなさい」と言われる。薄暗いなか、教えの通り波打際を泣きながら歩いていると、七匹の蛇の子が海に落ちた。娘はお婆さんに助けられて、ツカサヤーに行き、線香を立てて拝むと、三日目のマンサンの折に、「わたしは神だ。宮古島を大事にして増やせ、わたしを信じて拝め」と言う。婆さんはそれが聞こえたらしく、「拝みます。拝みます」と答えた。このとき生まれた七匹の蛇の子は、それぞれ宮古島の各地を守っている。長男が漲水、次男が赤名宮、三男がツヌジ御獄、四男が新里、五男が保良、六男が浦底、七男が狩俣に座っている。それで宮古島には悪い病気は入れない。

#### 〈蛇神の子神誕生〉

こうして何時間か、そこに倒れていると、父ちゃんが探しに来た。線香をもらって、一生懸命に拝むと、まもなく神さまは許してくれた。後にその場所は、植物園の係りにお願して、御願所を作り、神さまのお告げにしたがい、今ミタイヌシ（見張の主）として拝

んでいる。

#### 〔成巫苦難③〕

右の植物園の体験は、大きな荷物が天からどうんと落ちてきたという感じだった。それからも苦しみはやってくる。体中が震える。道を歩いていても、神がのりかかると、そのまま電柱に抱きついたりする。暑いなか一時間も二時間も抱きついたまま、「神さま放して下さい。わたしを許してください」と頼んでいる。道の途中では、お受けしますとは言えないから、「許して下さい。許して下さい」と言うだけである。こうなると一週間は苦しむ。それでも許されないと、一千日間にも及ぶ。「ほんとうにやる気があるか」と言われて、「はいります」とは答える。人間は切り替えが早いからそうは言う。しかし、一年、二年では、自分の心を全部、神さまにあげますということにはなれない。自分の心は神さま半分というほどで、全部は受け入れられない。それで十三年間苦しみ、苦しめられた。迷いが戻つては神さまに怒られる。十三年間、神さまは山へ連れて行つたり、海へ連れて行つたりして苦しめる。皆からはノイローゼだと言われる。神さまに連れられて、どこに落されるか分らない。夜中に歩き回る。神さまが放すと、オボツの墓中に坐つてしたり、葬儀の跡の花の中に坐つてしたりする。「お前はこうなるべきだ」と坐らされる。目をさまして、午前の三時、四時に匍匐出し、どこか分らぬところから、夜明けとともに、家を探して戻つてくる。こうすることを何十回となく繰り返した。修業だったのでしょうか、そのときは難儀だ、苦労していると思うだけであった。

### 〔成巫の憑依〕

四六歳の折、とうとう、ほんとうにやるかやらないか、命と引き替えということになった。天理教に子どもを頼みに行つて戻つてみると、小学三年の三男がのびてしまつてゐる。ああ、子どもに来たなあと思つた途端、「さあ、わたしはやります。どんなことでも、この子は救つてください。わたしはやります」と心に決めた。すると神さまは、「決めたなら、それをしつかり示せ」と言われる。「約束をしよう。そしたら子どもは一時間で直してやる」と言われる。そこで目が覚めた。腹が決まつた。途端に子どもは息を吹き返した。

それと同時に自分の体が動かなくなり、「ありがとうございます。わたくしは約束します」と言つて、そこに坐つたまま、一週間、水も飲まない、何も食べない、トイレにも立たない。ぼうつとなつて一週間、そこで断食してしまつた。全く生まれたままの気持になつた。神さまは何も言われない。ぼうつとなつて自分は神さまそのものに生まれ替つた。

### 〔成巫確認〕

神さまに許されて坐つていると、友だちが三人、突然にやってきて、「あなたは神さまをやるべきだ。わたくしたちの運勢を見てくれ」と言う。神さまと約束はしたが、どうやっていいのか分らない。迷つていると、神さまがカーッと体にやつて来て、「お前はやらないと、受けるまで仕打ちされるぞ。体あってのものだ」と、だんとくる。分らないが、線香をつけ、「どうすればいいんですか。どうぞ見てください」と言つて、神さまが先祖のことから、いろんな

ことを次々と言われる。その神さまの言う通り、友だちに「こういうことはありませんか。ああいうことはありませんか」と言うと、「その通り、その通り」「珍しい、珍しい」と言い、三人ともども、「どうしてあんたはこんなことが分るのか」と驚いて帰る。

### 〔マンサン・神口〕

そのまま神拝みをやつては気が許せないので、あっちこっちの御嶽を回つて拝んで歩いた。神様の言われるままに、一日に十ヶ所以上も回つた。やつと自分の心が収まつたので祭壇にお供えものをいっふい整え、三日間のお祝をした。宮古中の御嶽の神さまの名を呼び寄せ、「今日から神の人となつて、神さまとともに喜びますから、足らないところは教えていただきます。またわたくしが行くときには、どうぞお許しください」と祈る。それぞの御嶽の神に線香を立てて祝い、三日間、ざんげをしたら、世界中の神さまが乗り込んでこられて、マンカイ、つまり神さまの方が、「よかつたねえ、ありがとうございます」と声をくださることとなつた。朝の九時から三日目の夕方まで、次々と神々が、自分はどこの神、どういう役わりの神、あなたにはこういうことを教える神と名告られ、まるで名刺をくださるよう、「あなたには許可を与える」と、全部、ずうと出て来てくださつた。

### 〔巫業開始〕

それで、トヨさんは、思いのままに神を呼び寄せることができるようになり、神拝みに入られたことで、それ以来はみると仕

事ができるようになり、子どももすくすくと成長するようになった。

以上のような経過によって、比嘉トヨさんは巫病を克服されたのである。しかも、その「罹病」からの神ダーリィの苦難は、三十餘年に及ぶものであり、それなればこそ「成巫」〔マンサン〕の後は、三十余年巫病は全く完治して、今日、もっとも信頼できる当地方随一のカン

カカリヤーとして祈祷・祈願につとめておられる。ちなみに、比嘉トヨさんはマンサンの折に多くの神々を迎えて、それぞれの神を拝めることとなつたのだが、その中心となるのは、はじめて比嘉さん

に憑依した植物園の見張主<sup>(タヌミ)</sup>と、その出身地の城辺町比嘉元島の御嶽に祀られる神（高腰按司）なる比嘉さん自身の守護靈である。

八月十日の午前、わたくしどもは、比嘉トヨ子さんから右のごとき巫体験をうかがつた後、当宮国家でおこなわれたブンダミに参座させてもらつた。わたくしどもと話をされながら、一小時間、線香を立てて神祭りの準備をされていたが、やがて線香の煙が大きくなってきた頃、「すぐに神は降りて来られますよ」と言って、東向きの神座に向つて坐り、まず神よせの祈願の呪詞を唱えられた。それも五分ほどで、手を合わせ口のなかでブツブツと唱えられるうちに、合掌の手が次第に激しく動き出し、やがてあくびを二度、三度くり返すうちに、神が降りてこられ、合掌をやめて正座のまま、体をふるわせながら、神の言葉が歌い出された。

ハイブカラユシヤユードオ  
ハイウフギニナーク  
ハイマアリムトゥーヤ  
ハイウセナガラ、神の言葉が歌い出された。  
嬉しい事をよ  
とても大きな世を

廻り元親は

ハイユンカギーサ

ハイカンヤユーヒドオ

ハイニガイカギーサ

ハイナミトウシュホーテイ

ハイカンヤユホーミノ

ハイミーユブテーン

ハイフファユギーサ

ハイスマサユカーラス

ハイムラサユカーラス

ハイサカイユウティ

ハイミヤークズマーンナ

ハイトウユミーヤミーハル

ハイナトウリヤーミーハル

ハイミンサユハーラ

ハイブンサユバーラ

ハイワーフアユビィーザ

ハイカヌバーユティ

ハイマアリユーワイス

ハイワードヤイスーバ

ハイウキイナーズマース

ハイウヤパーユタアーヤ

ハイシンジーヤウーテイ

謡う清らさよ  
神はよく知る  
願う清らよ  
並み寄せる

神は尊く  
夫婦の事をば  
子供たちの事をば

島に嫁に来て  
村に嫁に来て  
栄えていて

宮古島中に  
鳴響きなさい

名を広げなさい

神にお供えして  
ブンにお供えして  
神を御供として  
神の子として

巡つてはいる  
あんただからよ  
沖縄島の  
先祖の神を  
信じていて

ハイウムウタアユヤーン

ハイタツダーユカーズ

ハイシンジーヤウース

ハイウワーヌユギーユバー

思つたように

出立も良く

信じているよ

あんたの世は

それはやはり左右相称の対句で、最初は三人称ふうに叙されながら、やがて一人称となって、願い主の宮国トミさんに歌いかけられる。およそ三十分、その神歌がおわると、比嘉さんは静かに一礼して手を合わせ、再び祈願のことばをブツブツと唱え、再び一礼、手を天に差しあげると、その御願はおわる。そのあと比嘉さんは、願い主の宮国トミさんに「神さまはたいへん喜んでおられ、どうぞ信じてください」と言つておられた」などと神歌の内容を説明される。ちなみに、この宮国さんは、沖縄本島から当宮古島に嫁いでこられて以来、沖縄の故郷の神を気にかけ、本日のブンダミもそれに対する御願であった。さらに比嘉さんは、願い主の宮国さんの質問に、線香を指差しながら、「来年の三月ごろ」などと答えられ、当日のブンダミは終了したのである。

そこで今、奄美ユタの事例としてあげた安世知トルエさんの成巫儀礼と宮古カンカカリヤーの根間ツル子さん、比嘉トヨさんのそれを対照してあげてみよう。なお、(一)シラン、(二)神ダーリィ、(三)頼みウガノ、(四)成巫（サトイ）の分別は、山下欣一氏のそれに準じてい(12)る。

### 三、成巫過程の神口・神語り

奄美・沖縄におけるユタ・カンカカリヤーの成巫過程は、かならずしも一様ではなく、それぞれ個人ごとに特有な展開をみせるものと言えよう。しかしながら、奄美地方においては、一定のユタ組織が維持されており、そのなかで、巫病を克服させ、新しいユタを誕生させる成巫儀礼がとりおこなわれており、その成巫過程の大枠を見据えることができる。これに対して宮古地方においては、カンカカリヤーも長く村落共同体のなかにあって、村落を越えた組織は、

奄美などの成熟はみえていない。それゆえに、その成巫儀礼も十分な展開を見せていないので、各自の成巫過程には相当な異同がうかがえる。それにもかかわらず、あえてそれを対応させてみると、そこにはやはり一定の構成をうかがうことができる。しかも、それは宮古の事例にとどまらずユタ組織のなかで育成された奄美的事例との間にも見出されるのである。

安世知トルエさん		根間ツル子さん		比嘉トヨさん	
(一) シラシ	(二) 神ダーリィ	(一) 巫病のきざし	(二) 巫病	(一) 巫病のきざし	(二) 巫病
(一) 頼みウガン		1 〔罹病〕	2 〔罹病〕	1 〔巫病のきざし〕	2 〔巫病〕
(二) 成巫 (サトイ)	6 〔七年祝〕	2 〔ボンダテ〕 3 〔神口〕 4 〔七さく廻り〕 5 〔憑依の神語り〕	38歳	37歳	36歳
	7 〔巫業開始〕	4 〔神の口開け〕 5 〔神の道開け〕	27歳	25歳	23歳
	6 〔成巫の確認〕	6 〔憑依の神語り〕 7 〔巫病苦難③〕 8 〔成巫の憑依〕	11 〔成巫の確認〕 10 〔マンサン・神口〕 9 〔巫業開始〕	5 〔巫病苦難①〕 4 〔憑依遍歴〕 3 〔巫病苦難②〕	1 〔巫病のきざし〕 2 〔巫病苦難①〕 3 〔憑依遍歴〕
		46歳	33歳	17歳	7歳

まず(一)「シラシ」では、どのユタ・カンカカリヤーでも指摘する  
もので、それならば、安世知さんの場合は、聴取洩れとするべきで  
ある。根間さんと比嘉さんは、いずれも十歳・七歳と少女期に  
おこっているが比嘉さんのそれは微かなもので、後からふりか  
えってのものであるが、根間さんの場合は、いわゆる神拝みの筋の  
生まれで、家族も周囲も早くから期待しており、本人も早くにそれ

を自覚するところがあつたようである。  
(二)「神ダーリィ」は、原因不明の病氣、つまり巫病の発現として  
示される。その〔罹病〕の年令が、安世知さんが三十六歳、根間さ  
んが二十三歳、比嘉さんが十七歳と大分の異同がある。しかし、そ  
れはいずれも激しい苦痛・苦難を強いられるものであるが、それぞ  
れ相当に違ひがある。そのなかで注目されるのは、根間さんの〔憑

依遍歴》である。その夢のなかでの神に導かれた異界・異境遍歴は、脱魂型シャーマンにも繋がるものであるとともに、神の子遍歴物語、つまり貴種流離譚の深層をなし、安世知さんの「憑依の神語り」「思い松金」にみられるごとく、巫祖神話の基層をなすものとして注目される。これに對して比嘉さんは、同じく「憑依遍歴」を含みながら、それは根間さんは大きくななく、むしろその神ダーリィの「巫病苦難」が、強烈に、かつ長期にわたっておこっている。そして、これとても、貴重流離の物語や苦難の巫祖神話の基層をなすものと判じられるのであるう。

(三)「頼みウガン」は、神ダーリィの原因を自覺して、その神チヂを探し求めるときで、それは(二)「神ダーリィ」の延長として、もはや逃れ得ないものとしておこなわれる。しかし、奄美の場合は成巫儀礼が整っているので、安世知さんにおいては、きわめて明確に自己覚された形でおこなわれるが、宮古の根間さん・比嘉さんの場合は、神ダーリィの激しさのなかで、自覺がせまられるという姿であらわれている。それにもかかわらず、奄美的安世知さんでも、宮古の根間さん・比嘉さんでも、この時期には、その神ダーリィのなかで、神の意志が「口」(神語り)という神のことばで示され、もはやユタとしてカンカカリヤーとしての道は抜きさしならぬものとして自覺されるに至っている。そして、その決定的な自覺によってようやく巫病からの脱却が見出されるのである。勿論、その過程は、三者三様である。たとえば安世知さんの場合は、「ボンダテ」(七さく廻り)という成巫儀礼の過程のなかで、「神口」(神語り)が無意識的

に飛び出しており、それによって安世知さんの神の道の方向は決まって、ようやく安定に向っている。また根間さんの場合は、神ダーリィの延長のなかで、神の口あけの神に導かれて「神口」が現れそれが「神の道あけ」の動機となつて展開しており、比嘉さんの場合は、神ダーリィが突然に激しくおこり、そのなかで「神語り」が無意識的に現われて、神の道は抜きさしならぬものとして自覺され、長期にわたる「巫病苦難」を体験しながら、遂にはかの「神語り」で示された神の意志に従うという形をとつてゐる。このように、その「神口」(神語り)の現われ方は一様ではないにしても、いずれの場合も、これが神の道を決定づけるものとなっており、この折の「神口」(神語り)なる神のことばがそれぞれに強く自覺され、それぞれ明確に記憶されていることは注目される。

最後の「成巫」は、いわゆる成巫の完成が示されるものである。まず成巫儀礼を繰り返しながら成巫の資格を獲得してきた奄美的安世知さんは、その最後の儀礼として「七年祝」が當まれ、それによつて成巫が確認されて「巫業開始」が認められるものとなつている。しかし、その神の道は、巫業という神助けにのみ示されるものではなく、あくまでも自らのための神拝みとして當まるもので、これは宮古の根間さん・比嘉さんにも通じるところである。すなわち、根間さんは、「神の道開け」の延長のなかで、「成巫の確認」があらわれ、その展開として「巫業開始」がおこつたのであり、その人助けの営業は、あくまでも神の道にしたがう自らの神拝みに付隨するものとして自覺されている。そして根間さんの今日の神拝みは、

神ダーリィの「憑依遍歴」に示された神の道への完成を志し、その神の体系の構築をめざすものとなっている。一方、比嘉さんは、同じ前段の「成巫の憑依」の延長のなかで、「成巫の確認」(マンサン・神口)が現れ、その展開として「巫業開始」がおこったものである。すなわち比嘉さんの場合は、安世知さんや根間さんとは違つて、神ダーリィから成巫に至る苦難は三十年近くに及んでおり、その巫病はほぼ完全に克服され今日はひたすら人助けの御願にしたがっておられるようである。しかし比嘉さんの場合は最後のマンサンの折に、次々と神口のもとに多くの神々が乗り込んでこられることである。そして比嘉さんは、これによって多くの神々を知り、これがその後の御願と深くかかわっていることが注目される。

以上のごとく、その成巫の過程は、三者三様であるが、本稿で特に注目したいのは、成巫過程においてあらわれる「神口」「神語り」である。繰り返すことになるが、そのあらわれ方に違いはあるが、三者ともにその「神口」「神語り」によって、成巫の道は決定づけられている。しかし、その「神口」「神語り」は、それぞれに強く自覚され記憶され、それがその後の御願の呪詞と深くかかわっているらしいことである。その関係の実証は、今後の調査にまたねばならないことが多いが、その関係は、奄美の安世知トルエさんの場合はよほど明確に示されており、宮古の根間ツル子さん・比嘉トヨさんの場合も、ある程度は示されているところである。また神話的内容とかかわる呪詞もまた、成巫以前にあらわれた「神語り」の叙述と深くかかわっていることが注目される。すなわち、その関係は、安

世知さんの「思い松金」(日光感精神話)で示されており、しかも叙述内容は、根間ツル子さんの神ダーリィの体験などによれば、かの成巫過程における「憑依遍歴」と深くかかわっていることが推察できるであろう。そして比嘉トヨさんが、「憑依の神語り」で示された「ミタイヌシ」(蛇智神婚神話)もまた、成巫後の御願のなかで、呪詞としての機能を果していいたことが予想できるのである。

## おわりに

### — 宮古のカンカカリヤーとツカサ・ユーサシ —

宮古諸島においては、村落共同体の神を祭るツカサ・ユーサシと、個人の神を祭るユタ・カンカカリヤーとは、きわめて近接した関係にあり、元来、いすれもそれぞれの村落共同体に属するものだったと言える。<sup>13)</sup>たとえば今日でも、ツカサ・ユーサシは、あらかじめ筋によって神ダーリィを体験し、カンカカリヤーとして個人の神祭りや占いをよくする人々のなかから選ばれるのが一般である。あるいはツカサ・ユーサシによる共同体の神祭りにもしばしばカンカカリヤーが含まれており、ツカサ・ユーサシの職業に、ユタ・カンカカリヤーの営む個人的な神祭や祈祷・卜占が属している例もある。

したがって、カンカカリヤーの成巫儀礼やそれとともになう神口・神語り、そしてその展開ともいうべき神祭りの呪詞と、ツカサ・ユーサシの入巫儀礼、およびその折に用いられる呪詞(神歌・神話)との間には、深いかかわりのあることが予想されるであろう。

本稿は、右の問題を宮古・狩俣の祖神祭（イダスウブナカ）を通して展開するつもりであったが、枚数の余裕がなくなつたので、別稿をもつて論究したい。

### 注

- (1) 奄美民俗談話会の山岡英世氏の案内、眞下厚君と同行。山岡氏は安世知トルエさんと親交が深いゆえに、安世知さんは心を割つて話してくださった。
- (2) 山下欣一氏『奄美説話の研究』第三篇・第六章「奄美的日光感精説話群」～第九章「奄美的日光感精説話群検討の基本的視点」、拙著『南島説話の研究』第一篇・第二章「日光感精説話の重層性」など。
- (3) 同氏の成巫体験は、滝口直子氏「シャーマンライフ・ヒストリカル アプローチ」（別府大学一般教育論集）九号に詳しく述べられている。
- (4) 同女の成巫体験は、佐々木宏幹氏「カミダーリィの諸相」（窪徳忠氏編『沖縄の外来宗教』）に簡単に紹介されている。
- (5) • (6) 松浪久子氏「宮古カンカカリヤーの成巫譚」（『奄美冲縄民間文芸研究』十三号所収）、同氏「カンカカリヤー（宮古巫覗）の成巫譚」（『大阪青山短期大学研究紀要』第十七号所収）
- (7) • (10) 福田晃・佐渡山安公の「宮古のカンカカリヤーの呪詞〈願い口〉」（『奄美冲縄民間文芸研究』第十四号）

に詳しく述べている。

- (8) • (9) 佐渡山安公氏「シャーマンが語る創世神話〈宮古島〉」（『奄美冲縄民間文芸研究』第十三号）

(11) 沖縄本島においても、それは珍しいことではない。たとえば、久高島においては、外間ノロの妹が当地のユタをつとめておられる（昭和六二年八月九日久高島昔話調査ノート）。山原の東村においても、ノロの妹がユタをつとめている例が最近報告されている（渡辺欣雄氏『沖縄の祭礼－東村民俗誌』一、祭司篇『日本民俗学』一八六号・渋谷研氏『沖縄におけるノロとユタ』）。

- (12) 「奄美的シャーマニズム」第一章第一節「奄美的ユタとノロをめぐる問題」
- 鎌田久子氏「宮古島の祭祀組織」（都立大学南西諸島研究委員会『沖縄の社会と宗教』所収）ここでは城辺町の保良集落がとりあげられているが、当地に限らず、より一般的なものである。

（ふくだ・あきら／立命館大学）